

関市内の小学生を対象にした大学内での宿泊型プログラムの実践 —「集まれSEKIッズ！サマーキャンプ」を通した 大学による地域向けイベントの意義に関する考察—

Overnight Stay Program at the University for Kids in Seki City —Consideration of the Worth of Events by the University in the Community through “Atsumare Sekids! Summer Camp!”—

東海林沙貴¹⁾
Saki TOHKAIRIN

抄録：本研究では、2023年8月に実施した大学内での宿泊型プログラム「集まれSEKIッズ！サマーキャンプ」の実践内容について報告し、その成果及び課題から、大学が地域に向けたイベントを開催することの意義を考察した。サマーキャンプ実践に対して、参加者の子どもたち及び保護者は非常に肯定的に捉えており、その理由として、2泊3日の間に普段とは異なる環境や経験を提供できたためであったと考えられた。そして、本実践を通し、大学が地域の子どもたち向けのイベントを開催することの意義として、物理的な近さを活かせること、様々な資源を有効活用できること、地域の子どもたちが集う場を創出できることの3点を考察した。今後の実践に向けては、より周到な準備の必要性が課題として指摘された。

キーワード：小学生、キャンプ、地域、大学、宿泊

I. はじめに

1. 研究の背景

子どもたちの体力低下が叫ばれるようになって久しい。文部科学省(2022)の「令和4年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果からは、令和3年度と比較して小学校5年生及び中学校2年生の体力合計得点が低下していることが確認できるとともに、スクリーンタイムが長い児童生徒が増加していることが明らかになっている。令和元年以降、子供たちの体力低下傾向は続いており、新型コロナウイルス感染症の拡大によって運動不足に拍車がかかったことが指摘されている(スポーツ庁, 2022)。そのような状況に鑑みて、スポーツ庁(2022)は、子供の運動習慣形成と体力向上に向けた今後の取り組みについて、地域・学校・家庭の連携が重要であることを示し、翌年には「子供の運動習慣形成と体力向上に向けた事例紹介～学校における体育・保健体育授業以外の取組事例～」(スポーツ庁, 2023)を作成している。この冊子においては5つのテーマごとに事例が示され、それぞれのテーマは①児童生徒の主体性を引き出す工夫、②家庭・地域等との連携、③場の確保・整備、用具等の工夫、④休み時間・放課後等の時間の工夫、

⑤時間割の工夫となっている。これらを鑑みても、体育科や保健体育科の授業の充実のみならず、その他の場面において、子どもたちが身体を動かす機会を保障することは非常に重要であるといえよう。

他方で、身体活動のみならず、子どもたちの体験的な活動が乏しいことも近年における大きな課題の1つである。平野(2013)は、編成しやすい体験活動として、自然体験、集団体験、奉仕体験、勤労体験、生活体験、創作体験の6つを挙げ、それらによって人間関係能力、生活慣行能力、社会規範能力、社会的役割能力の習得が期待されると述べている。しかしながら、様々な社会環境の変化によって、近年の日本の子どもたちがそのような体験活動の機会を日常生活の中では十分に得難い状況にあることを指摘している(平野, 2013)。

特に近年は、児童生徒の成長や学びを支える役割の担い手の1つとして、地域に期待が高まっており、運動部活動の地域移行化の動きも、そのことの表れの1つといえよう。本学においても、多様な分野・形で、地域貢献事業が行われてきたことはいうまでもないが、特に地域の子どもたちを対象とし、大学関係者がイベントを主催することにはどのような意義があるだろうか。

例えば、NPO法人全国てらこやネットワークは、子

1) スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科

ども・学生・大人という3つの世代と、学校・家庭・地域の3つの現場をつなぎ、子どもたちを育てていく地域総がかりの教育活動を進めている(小黒, 2023)。活動が開始してから全国各地で41団体が活動しており、学生の登録者数は年間約1000人で、これまでの延べ事業回数としては年間約900回、延べ参加者数は年間約7000人にのぼるという(全国てらこやネットワーク, 2024)。その団体の1つである、大阪府・泉佐野市の「SANOTERA」は2008年にスタートした事業で、現在は大阪体育大学や羽衣国際大学などの学生がスタッフとなり、泊まりがけでレクリエーション行ったり、季節にちなんだイベントを行ったりしている(小黒, 2023)。地域の多様な世代の居場所となり、また、世代間の交流を生む場所となっているという「SANOTERA」では、地域の資源が活用されているが(小黒, 2023)、大学という資源を有効に使うことも十分にできるであろう。

2. 研究の目的

本研究では、大学による地域貢献の方策の1つとして、子どもたちの身体活動を促したり、非日常での多様な経験を提供したりする場をイベントとして開催することの意義について、考察を試みる。そのために着目するのが、筆者及びそのゼミ生が中心となって企画・運営した宿泊型プログラム(以下、サマーキャンプとする)であり、本論文はその実践と成果についてまとめ、報告することを目的としている。

II. プログラムの概要

1. プログラムの計画

近年の子どもたちを取り巻く状況については緒言で述べた通りである。そのような実態のなか、自然の中で十分に身体を動かしながら他者と時間を共にする機会を子どもたちに提供することは、参加者側にも、そして企画者側にも意義があると考え、筆者が担当する専門演習ゼミの3年生10名に実施の提案を行った。その際、目指すコンセプトとして「自然と戯れるー子どもも大人も、自然に帰る時間にしよう」、「仲間と戯れるー非日常で、いつものしがらみから解放されよう」、「みんなで“つくる”ー子どもたちは“お客様”ではなく、みんなフラット」の3つを筆者から提案し、これらを基に具体的な活動を計画した。

サマーキャンプの内容を具現化するうえで、①学内の資源を活用するため、大学内に宿泊するプログラムにすること、②子どもたちとともに行うアクティビティは身体活動を伴う遊びを基本とすることの2点を中心に据えた。そして、近隣地域で営業している飲食店及び農家に協力を仰ぎ、サマーキャンプ中の食事と田畑を活用したプログラムに場所を提供してもらうこととした。

サマーキャンプの詳細や食事面については、リーダー及び各時間の担当者を決定した後、専門演習ゼミの時間

を活用して計画を進めた。他方、大学内での事務的な手続きや、協力者との対外的なやりとりに関しては、筆者が進めた。

参加者の募集は、2022年3月に実施した「SEKIカップ」の参加者に対するチラシの配布によって行った。「SEKIカップ」は、中部学院大学スポーツカレッジの協力の下、関市内の小学3・4年生を対象に開催したスポーツ大会である。3年生のゼミ学生が企画及び運営を担い、運動の得意・不得意に関係なく楽しめるような運動で構成したものである。そして、今回のサマーキャンプの参加者募集は、あえてそのような対象に限定した。その理由には主に2点挙げられる。1点目が、保護者の立場からみた場合、2泊3日の行事であるにも関わらず、全く知らない大学教員や学生に子どもを預けるのはためられるのではないかと予想したことである。そして、2点目が、学内に宿泊するという試み自体が初めてであったということである。これらに加えて、日程的に合わないことや金銭面でのハードルがなかったとは言い難いため、本実践の対象者は非常に限定された集団であったことは否めない。しかし、今後の実践に向け、本実践から述べられる範囲での成果と課題を述べることにしたい。

今回のサマーキャンプ実施に際し、配布したチラシは図1の通りである。



図1 サマーキャンプのチラシ

2. サマーキャンプの実施

本サマーキャンプは2023年8月21日(月)～23日(水)の2泊3日で行った。基本的な活動場所は中部学院大学関キャンパス内で、食事に関しては調理室を、宿泊に關

しては運動学実習等を使用した。なお、寝具は学内に保管されていた寝袋を使用した。

参加者は、小学校4年生の男子児童2名と、5年生の女子児童3名であった。先述のように、いずれの参加者も「SEKIカップ」に参加した小学生であった。当日参加したスタッフは、専門演習ゼミを履修している3年生9名であった。

3. 実際の様子

実際に行った活動内容について、特に2つの概要について述べる。

a. KOBE FARM の畑を活用したプログラム

2日目となる8月22日は、KOBE FARMにて田畑を活用したプログラムを実施した。KOBE FARMは、揖斐川町上東野にて代表の栗野和也氏を中心に営まれている有機農家で、農業体験や畑でのイベントにも積極的に取り組んでいる。子どもたちを対象とした本サマーキャンプの趣旨に賛同を頂けたことから協力を仰ぐこととなり、2日目のプログラムはKOBE FARMにて実施する運びとなった。なお、この日行われたアクティビティ及び昼食を含むプログラムにはKOBE FARM側でも参加者を募集したため、筆者らのサマーキャンプに参加していない子どもたちも含まれており、未就学児から小学校6年生まで様々な年代の子どもたちが含まれていた。実施時の様子を、図2に写真で示した。



図2 田んぼでの綱引きの様子

このようなプログラムは、屋外で遊ぶことが少なくなっている現代の子どもの実態に鑑みて計画された。村瀬(2007)は、現代の子どもたちが20~30代及び40~50代の親世代と比較して屋外で遊ばない傾向が強くなっていることを明らかにしている(村瀬, 2007)。そして、子どもたちの遊びを取り巻く環境に関しては、広場や空き地で遊ばなくなっていること、テレビやインターネットなどのメディアの影響が大きくなっていることなどに親世代との違いがみられることを指摘している(村瀬, 2007)。このような研究からは、遊びの実態の変化に伴い、子どもたちが土や泥に触れたりする機会も減少していることを予想できる。しかしながら、土や泥に触れることが年齢に関係なく、ポジティブな効果をもたらすこ

とは、農業体験を対象にした研究から推察できる。例えば、中川(2009)は、大学農学部の学生を対象とした、幼少時の自然体験が大学生の農業意識に与える影響についての調査の中で、幼少時の野外での自然を対象にした遊びと、青年期の農業に対するポジティブな認識が関連していることを考察している(中川, 2009)。また、農業体験が体験時間の長さに関わらず、参加者の農山村や農林業に対する認識や作業への理解を高めることに繋がったことを報告した研究もみられる(重松ほか, 2004)。今回のサマーキャンプの間に実施した田畑でのアクティビティは、農業体験を含むものではなく、短時間であった。しかし、田んぼに入って泥まみれになりながら身体を動かしたり、用水路で手足を洗ったり、畑にあった初穀を踏んでみたりという、五感を使った、非日常的な体験の機会になったと考えられる。

参加者の子どもたちの実際の様子として、最初の一步目に田んぼに足を踏み入れることにはためらいがあったものの、一度入ってしまうと泥の気持ちよさや、独特の感触が心地よく、面白かったようであった。また、全身が泥に浸かることに対しても、一度試みてからはためらいがなくなり、何度も繰り返していた。

主に実施したものととして、田んぼの中での綱引き、かけっこ、鬼ごっこ、ボール遊び、そして、畑や畑周辺での談話や水鉄砲を使った鬼ゲームであった。田畑でのプログラムのみに参加した子どもたちも含め、ほとんどの子どもたちは、田んぼでの活動が非常に面白かったようで、自分達から「もう1回綱引きやりたい!」や「鬼ごっこやろう!」などと提案しあったり、大学生を誘ったりして、存分に身体を動かしていた。

一方で、そのような活動があまり好きではない子もおり、そのような子は大学生と一緒に泥だんごを作ることに一生懸命になっていた。そして、この参加者の事例は、田畑を活用したアクティビティは多様に展開できるということへの理解に繋がったといえる。今回のサマーキャンプは「身体を動かすこと」を中心に考えていたために、田畑での遊びもスポーツ的な要素を含むものを中心としていたが、今後は激しく身体を動かすものでない活動も取り入れることが重要であろう。

b. サマーキャンプ中の食事づくり

3日間の食事のうち、1日目の夕食、2日目の朝食・夕食、3日目の朝食については、大学の調理室を借りて子どもたちと大学生とで共に作ることを基本として計画した。しかし、1日目の夕食づくりの際、子どもたちが中心となって調理を進めると、予想していた以上に時間がかかってしまうことがわかった。スケジュールしていた時間や、シャワー使用との兼ね合いもあり、朝食は大学生が作り、2日目の夕食は主に大学生が作り、子どもたちに仕上げをしてもらうようにした。

事前に子どもたちが好むメニューを検討し、主に以下

のようなメニューで構成した(表1)。なお、保護者には事前にアレルギーの有無を確認した。実際の様子を図3に示した。

表1 3日間の食事メニュー一覧

1日目	昼食	タコライス(岐阜市内の飲食店に依頼)
	夕食	ハンバーグ、サラダ、味噌汁、ご飯
2日目	朝食	スクランブルエッグ、ベーコン、パンケーキ、トースト
	昼食	カレーライス(KOBE FARMに依頼)
3日目	夕食	ペッパーライス、サラダ、味噌汁、フルーツポンチ
	朝食	ハムエッグ、味噌汁、ご飯



図3 ハンバーグ作りの様子

大学生と子どもたちで担当を決め、それぞれが作業を進めたが、子どもたちは非常に意欲的に調理に参加していた。家庭で作るよりはるかに多い分量のご飯を研いで炊いたり、ひき肉を捏ねたり、味噌汁の具材を切ったりという作業を、時に大学生にアドバイスを求めながら丁寧に行っていた。一方で、日常生活では自分で料理をしない大学生もいたため、大学生が一方的に教えるのではなく、一緒になって試行錯誤している姿もみられた。

c. サマーキャンプ全体でのその他の工夫点

今回のサマーキャンプでは、大学生と子どもたちがフラットな関係の中で交流することをコンセプトの1つとしていたため、お互いをニックネームで呼び合うことにした。また、子どもたちの安全を十分配慮するために、基本的に共に活動する大学生と子どもとのペア決め、3日間過ごすこととした。それぞれの大学生は担当の子どもへの行動に責任もつことができる点で、このようなバディ制度は有意義であったといえる。

2泊の寝泊まりは、運動学実習棟を使用した。当初、学内に保管されているテントを使用し、屋外で寝泊まりすることも検討したものの、サマーキャンプ実施時の気温が非常に高かったため、空調管理が可能な運動学実習棟を使用することとした。子どもたちのほとんどは寝袋で寝ることが初めてであったようで、そのことだけでも非常に楽しんでいただこうである。また、入浴については、体育館のシャワー室を使用した。

3日間を通して、用具や荷物の保管、集合及び待機ができるよう、10号館の教室一部屋を拠点にすることとした。

Ⅲ. サマーキャンプの成果及び実践上の課題の検討

本項では、サマーキャンプの成果及び実践上の課題を明らかにするために実施したアンケートに結果について述べていく。なお、アンケートに際しての倫理的配慮として、個人が特定できない形でデータを活用することとし、実施にあたっては、所属機関の研究倫理審査の承認を得た(承認番号:C23-0026)。

今回のサマーキャンプは、先述の通り、非常に限定された5名の参加者であった。データの“数”という面で、5名は乏しいであろう。また、今回のサマーキャンプや、それにつながるSEKIカップへの参加を希望した時点で、そもそも活発な子どもたちあるいは保護者であると考えられ、偏ったサンプリングであることは否めない。したがって、本報告の一般化が困難であることは筆者も理解しているところであるが、今回の新たな試みが、個々の子どもたちやその保護者にどう捉えられ、また、今後にどのように繋げられるかを考えるためには、あるいは、様々な大学や地域での取り組みの一助とするためには、実践報告として1つの資料に残す必要及び意義があると考えられる。以下では、これらに鑑みて、サマーキャンプ実践の成果及び課題の記述を試みたい。

1. 子どもたちを対象としたアンケート

サマーキャンプの最終日に、参加した子どもたち5名に対して紙媒体で2つのアンケートを実施した。1つは、西田ら(2002)によって作成された「児童用組織キャンプ体験評価尺度」を基に作成したもの(図4)である。今回の参加者は5名であり、統計的な結果を導き出すことは困難であるものの、今後に向けた試みの一環として、また、個別の事例を報告するうえでの参考として実施した。もう1つのアンケートは、サマーキャンプの感想について、主に自由記述の形式で問うアンケートであった(図5)。

なお、実施にあたっては、子どもたちが理解できるような内容で、アンケートの趣旨を説明し、回答の拒否も可能であることを説明した。

実施したアンケートの結果と、それらから考察できる今回のサマーキャンプの成果について述べていきたい。

まず、西田ら(2002)によって作成された「児童用組織キャンプ体験評価尺度」の結果を表2に示す。回答は「すごくそう思う(3点)」から「まったくそう思わない(0点)」の4件法で求めた。尺度に関しては、体育やスポーツなどの身体活動に特化して成果を測定するものでも、一方で、自然体験のような野外活動に特化して成果を測定するものでもなく、可能な限り3日間の実践全体をふりかえることができるものを使用することを意図しながら、さらに、小学生を対象にした短期的な実践であることを踏まえ、簡便に実施できるものを採用すること

キャンプについてのちようさひょう				
()年 名前()				
◎もっとも近いけんの数字に○をつけてください。				
	すごく そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
1 緑のおいそいだことがあった	3	2	1	0
2 おいしい空気をすったことがあった	3	2	1	0
3 きれいな緑や花などをみたことがあった	3	2	1	0
4 自然の音を耳をすましてきいたことがあった	3	2	1	0
5 これまでにやったことのないことにちようせんしたことがあった	3	2	1	0
6 なんらかの目しようをたっせいすることができたことがあった	3	2	1	0
7 むずかしそうと思っていたことができたことがあった	3	2	1	0
8 自分にはできないだろうと思っていたことができたことがあった	3	2	1	0
9 グループ(班)の人と仲良く活動したことがあった	3	2	1	0
10 グループ(班)でまとまって活動したことがあった	3	2	1	0
11 リーダーと親しく活動したことがあった	3	2	1	0
12 たくさんの人たたく協力したことがあった	3	2	1	0
13 自分が思っていることをまだちに伝えたことがあった	3	2	1	0
14 人に自分の気持ちを伝えることができたことがあった	3	2	1	0
15 だれかに分からないことをどうしたら良いか聞いたことがあった	3	2	1	0
16 だれかがいつも話を聞いてくれた	3	2	1	0
17 自分のわがままを考えたことがあった	3	2	1	0
18 自分の良いところやだめなところについて考えたことがあった	3	2	1	0
19 みんなと頑張ることの大切さを考えたことがあった	3	2	1	0
20 自分から新しいことを知らうとしたことがあった	3	2	1	0

図4 西田ら(2002)をもとに作成した「児童用組織キャンプ体験評価尺度」

とし、西田ら(2002)の尺度を用いることとした。
アンケートの結果から、5名の子どもたち全員が「すごくそう思う」と回答したのは、質問3、9、11、12、14、15の5つであった。今回のサマーキャンプの内容に鑑みると、みんなで料理をしたり、寝袋などの用具の準備・片付けをしたり、また、学年や在籍している小学校に関係なく、みんなで様々なアクティビティをしたことが、質問9や12に結果として現れたと考えられる。そして、大学生という存在が身近にいたことによって、困った時に何かを尋ねたり、要求を聞いたりすることができたと考えられ、それが質問11、14、15の結果に繋がったのであろう。

質問1~4に関しては、西田ら(2002)が「自然との触れあい体験」と因子名をつけた質問項目であるが、これらに特化したアクティビティを明確に位置付けていたとは言い難い。田畑でのプログラムの際に、自ら草花に触れていた子どもたちも見受けられたが、大学内での活動時にはそのような場面を設けることはなかったため、2点の回答がいくつか散見されたと考えられる。

次に、サマーキャンプ全体の感想を尋ねたアンケートの結果を表3に示す。キャンプへの参加については、自分から希望した子どもたちがほとんどであったが、1名は両親に決められたとのことであった。サマーキャンプが楽しかったかどうかという質問には、全員が「とても楽しかった」と回答していた。その理由には「みんな」という語がいずれの回答にも入っており、他の子どもたちや大学生との良好な関係の中で3日間を過ごすことができたことが大いに影響していると考えられる。5名全員がまた参加したいかどうかの質問に対して、「とても

★サマーキャンプ アンケート★			
()小学校 ()年 名前()			
3日間のサマーキャンプに参加してくれて、どうもありがとう！ また楽しいイベントを考えたいと思うので、キャンプについての意見を聞かせてね。			
*以下のしつもんについて、あてはまるものに○をつけてください。			
0. このキャンプにさんかするのはだれが決めましたか？			
自分が行きたいと言った	お父さん・お母さんにすすめられた	あだちにすすめられた	そのほか
1. 3日間のサマーキャンプは楽しかったですか？			
とても楽しかった	まあまあ楽しかった	あまり楽しなかった	全然楽しなかった
→ なぜそのように思いましたか？理由をくわしく教えてください。			
2. また同じようなイベントがあったらさんかしたいですか？			
とてもそう思う	まあまあそう思う	あまりそう思わない	全然そう思わない
3. 次に同じようなキャンプがあるとしたら、なにをしたいと思いますか？			
4. 3日間でいちばんいんしようにのこったことを教えてください。			
5. 最後に、3日間の感想や、大学生へのメッセージをどうぞ！			
どうもありがとう！また遊ぼうね^^			

図5 サマーキャンプの感想についてのアンケート

そう思う」と回答しており、次回やりたいこととしても身体を動かすアクティビティを挙げていた。これは、今回のサマーキャンプにあたっては、先述したように、3月に実施したスポーツ大会「SEKIカップ」の参加者に対して募集をかけたために、基本的に身体を動かすことが好きな子どもたちが集まったからであると考えられる。「3日間で印象に残ったこと」として、身体を動かしたことに加え、日常的にはあまり経験することのない事柄(例えば、寝袋で寝ることや、大学内を探検したことなど)が挙げられていたといえる。ドッジボールや鬼ごっこについても、普段の小学校での生活では、休み時間などの限られた時間の中で行っているものの、今回のサマーキャンプ内では、それほどの短さではなく、また、厳密に時間が決まっているわけでもなかったため、存分に身体を動かしたり、その楽しさを感じたりすることができたのではないかと考えられる。最後に記述を求めた感想や大学生へのメッセージからは、大学生が「教えてあげる」のではなく、「一緒に活動する」ことを基本とした今回のサマーキャンプのコンセプトを子どもたちが肯定的に捉えていたといえよう。

2. 保護者を対象としたアンケート

サマーキャンプの最終日に、保護者に対してはオンラインアンケートへの回答を依頼した。依頼時にはアン

表2 児童用組織キャンプ体験評価尺度の回答

	質問	A児	B児	C児	D児	E児
1	緑のにおいをかいだことがあった	2	3	3	3	3
2	おいしい空気をすったことがあった	2	3	3	3	3
3	きれいな緑や花などをみたことがあった	3	3	3	3	3
4	自然の音を耳をすましてきいたことがあった	2	3	2	2	3
5	これまでにやったことのないことに挑戦したことがあった	2	3	3	3	3
6	なんらかの目ひょうをたっせいすることができたことがあった	2	3	3	3	2
7	むずかしそうと思っていたことができたことがあった	2	3	3	2	3
8	自分にはできないだろうと思っていたことができたことがあった	3	3	3	3	2
9	グループ(班)の人と仲良く活動したことがあった	3	3	3	3	3
10	グループ(班)でまとまって活動したことがあった	3	3	3	3	2
11	リーダーと親しく活動したことがあった	3	3	3	3	3
12	たくさんの人たちと協力したことがあった	3	3	3	3	3
13	自分が思っていることを友だちに伝えたことがあった	3	3	3	2	3
14	人に自分の気持ちを伝えることができたことがあった	3	3	3	3	3
15	だれかに分からないことをどうしたら良いか聞いたことがあった	3	3	3	3	3
16	だれかがいつも話を聞いてくれた	3	3	3	2	3
17	自分のわがままさを考えたことがあった	2	3	3	1	3
18	自分の良いところやだめなところについて考えたことがあった	2	3	3	3	3
19	みんなと頑張ることの大切さを考えたことがあった	2	3	3	3	3
20	自分から新しいことを知ろうとしたことがあった	2	3	3	3	-

表3 サマーキャンプ全体の感想についてのアンケートの回答

	A児	B児	C児	D児	E児
1. 誰がキャンプへの参加を決めたか	自分	両親	自分	自分、友達	自分、両親
2. 3日間のサマーキャンプは楽しかったか	4(とても楽しかった)	4(とても楽しかった)	4(とても楽しかった)	4(とても楽しかった)	4(とても楽しかった)
(2の理由)	みんなと楽しくできたから	みんなだれかやる?と尋ねてくれたから	大学生のみんなといっしょに遊べてうれしかったし、仲よくできたから	みんなでドッジやおにごっこして、学校では走れないけどたくさん走ったから。	うんどうをたくさんでできたしみんなできょうりよくしてごはんもつくれたし、なつやすみ、あまりからだをうごかさなかったから、ひさしぶりにからだをうごかせた
3. また参加したいか	4(とてもそう思う)	4(とてもそう思う)	4(とてもそう思う)	4(とてもそう思う)	4(とてもそう思う)
4. 次は何をしたいか	ドッジボール・おにごっこ・かくれんぼ・かんけり	げんぶ	おにごっこ!!	スイカわり、おにごっこ!!	3日間やったこと、おにごっこ!!ふんとり♡
5. 3日間で最も印象的だったこと	ドッジとねぶくろ	がっこうたんけん	おにごっこ、かくれんぼ	ふんとり取りゲーム!たんぼに行ってちどらだらけになったこと。おにごっこ	大学生とたくさんあそんだこと、ふんとりやおにごっこ、ドッジボールがたのしかったです。ありがとうございます!
6. 感想や大学生へのメッセージ	3日間ありがとうございました	いろんなだいがくせいと、ともだちになれたからよかった	みなさんでいっしょに遊んだのしかったです。またいっしょに遊びたいです。	いっしょにおにごっこ、かくれんぼなどのあそびをやってくれてありがとう。また、キャンプやってみてね!!	大好き!!おにごっことドッジボール、ふんとりがたのしかったですありがとうございます

アンケートの趣旨を説明し、回答は義務ではないことを伝え、アンケートの冒頭にも同様の内容及び回答の提出をもって調査への協力を得られたものとする旨を記載した。5名中4名の保護者から回答を得られた。質問した内容及び選択肢については、表4に示した通りである。得られた回答を表5に示した。保護者の視点と子どもの視点の両方から、なぜサマーキャンプへの参加を決めたかについての回答を求めた。参加を決めた理由はそれぞれであったが、いずれの回答も、参加者本人である子どもたちよりも保護者の方が多くの理由を挙げていた。このことから、今回のサマーキャンプに対して何らかの期待や魅力をより感じていたのは保護者であったと考

えられ、地域でのイベントが子どもたちを対象としたものであったとしても、保護者に対する周知や広報活動が非常に重要であることが示唆されたといえる。参加させて良かったかどうかについての質問では、4名全員が「とてもそう思う」と回答しており、今回のサマーキャンプが保護者に対して非常に肯定的に捉えられていたことがわかった。そして、その理由からは、普段の生活とは異なる環境で3日間を過ごしたことがそのような回答に繋がったと考えられる。子どもたちにとっては未知である大学という場所で2泊分の寝泊まりをすることに加え、大学生とは全員が初対面で、子どもたち同士もほとんどが初対面であった。つまり、お互いの関係

表4 保護者向けに実施したオンラインアンケートの質問内容一覧

質問	選択肢
・お子さまのお名前	
・お子さまの学年	
・今回のキャンプへのご参加を希望されたのはどなたですか？ (複数回答あり)	お子さま 保護者さま その他
・なぜ今回のキャンプへのご参加を決めましたか？(保護者さま) (複数回答あり)	お子さまの運動不足・生活習慣が気になっているから お子さまに新しい友達ができそうだから 家から近いから 大学生のような年上と関われるから 友達に誘われたから 中部学院大学には親しみや信頼があるから 普段とは違う環境で過ごしてほしいと思ったから 畑でのアクティビティに興味があったから お子さまに新しい経験をさせたいと思ったから 以前のイベント (SEKI カップ) が良かったから 参加費が安かったから プログラム内容が面白そうだったから その他 (自由記述)
・なぜ今回のキャンプへのご参加を決めたようでしたか？(お子さま) (複数回答あり)	運動不足・生活習慣が気になっているから 新しい友達ができそうだから 家から近いから 大学生のような年上と関われるから 友達に誘われたから 中部学院大学には親しみや信頼があるから 普段とは違う環境で過ごしたいと思ったから 畑でのアクティビティに興味があったから いつもと違う新しい経験をしたいと思ったから 以前のイベント (SEKI カップ) が良かったから 参加費が安かったから プログラム内容が面白そうだったから その他 (自由記述)
・今回のキャンプにお子さまを参加させて良かったですか？	とてもそう思う ややそう思う あまりそう思わない 全くそう思わない
→ そのようにご回答された理由をお聞かせ下さい。	
・お子さまのご帰宅後の様子や、キャンプでの出来事について話していたことなどがあれば教えてください。	(自由記述)
・実施前のキャンプへの期待度 (保護者さま)	10段階評価
・実施後のキャンプへの満足度 (保護者さま)	10段階評価
・またキャンプを開催する場合、どのような内容をプログラムに入ると良いでしょうか。あるいは、改善が必要な点はどのような点でしょうか。ご意見をお聞かせください。	(自由記述)
・今回のキャンプに対する全体的な感想や要望、大学生へのメッセージ等を頂ければ幸いです。	(自由記述)

性もほぼゼロの状態、かつ、普段生活している場ではない場での生活だったことによって、子どもたちが“新しい自分”を、一部でも解放することができたのではないかと考えられるのである。そして、そのことは1日限りのプログラムでは起こらず、2泊3日という時間が重要であったように思われる。

子どもたちが普段とは異なる環境での2泊3日を経験したことに新鮮さや楽しさを覚えていたことは、次に尋ねた、帰宅後の様子に関する回答にも見受けられた。

今後に向けた改善点としては、企画の目的やコンセプトの詳細な共有、スタッフの充実及び動き方、活動内容の多様化、サマーキャンプ実施中の保護者への連絡等が挙げられていた。特に、企画のコンセプトのより明確な提示及びスタッフの充実が不可欠であろう。前者に関しては、コンセプトをより明確に保護者に伝えることによって、プログラム内で実施する具体的な活動を採用した理由や意義を理解してもらうことが可能であると考え

られ、後者に関しては、スタッフの人数の増加と業務の分担が実現すれば、効率的な運営と子どもたちへのより充実したサポートになると考えられるためである。今回の実践は初めての試みであったため、いずれの指摘も重要である。これらは今後活かすこととしたい。

最後に回答を求めた全体の感想からは、次の機会の参加を希望している子どもたちが多くいたことに加え、保護者も今回の実践を価値のあるものと感じていたことがわかった。先述のように、今後に向けた改善点は多々残されており、スタッフとして携わった学生からも具体的な反省点は多く挙げられたものの、概ね満足できる成果となったように思われる。

IV. 地域において大学がイベントを主催する意義に関する一考察

今回のサマーキャンプの実践を、今後の多様な実践に

表5 保護者むけに実施したオンラインアンケートの回答

	B児	C児	D児	E児
1.誰が参加を決めたか	保護者	子ども、保護者	子ども、保護者	子ども、保護者
2.なぜ参加を決めたか(保護者)	<ul style="list-style-type: none"> ・お子さまに新しい友だちができそうだから ・大学生のようにな年上と関われるから ・普段とは違う環境で過ごしてほしいと思っただから ・お子さまに新しい経験させたいと思っただから ・以前のイベント(SEKIカップ)が良かったから ・集団行動を勉強してほしい 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生のようにな年上と関われるから ・普段とは違う環境で過ごしてほしいと思っただから ・お子さまに新しい経験させたいと思っただから ・以前のイベント(SEKIカップ)が良かったから ・お子さまに新しい経験させたいと思っただから 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達に誘われたから ・中部学院大学には親しみや信頼があるから ・お子さまに新しい経験させたいと思っただから ・参加費が安かったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・お子さまに新しい友だちができそうだから ・大学生のようにな年上と関われるから ・普段とは違う環境で過ごしてほしいと思っただから ・お子さまに新しい経験させたいと思っただから ・以前のイベント(SEKIカップ)が良かったから ・参加費が安かったから ・プログラム内容が面白そうだったから ・中部学院大学には親しみや信頼があるから
3.なぜ参加を決めたか(子ども)	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラム内容が面白そうだったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段とは違う環境で過ごしたいと思っただから ・いつもの違う新しい経験をしたいと思っただから ・以前のイベント(SEKIカップ)が良かったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達に誘われたから 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい友だちができそうだから ・大学生のようにな年上と関われるから ・中部学院大学には親しみや信頼があるから ・普段とは違う環境で過ごしたいと思っただから ・いつもの違う新しい経験をしたいと思っただから ・以前のイベント(SEKIカップ)が良かったから ・プログラム内容が面白そうだったから
4.参加させて良かったか	とてもそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う
(4の理由)	<p>多くの初体験、初対面、団体行動を経験し、複数の大人や異性とも関わられたので、周りに流されるだけでなく自分でもあれこれ思える</p>	<p>とても楽しかったよ。大学生の方たちとお別れしてから、とても楽しかったよ。学生さんたちが、上手に楽しく関わってくれたよ。おかげで遊びができて楽しかったよ。普段とは違う環境で過ごしてよかったよ。楽しんで参加させて頂き、めいめい遊びたいと思っただから。ハンバーグ作りや構内での鬼ごっこ、おやすみ前のお話、どれも楽しかったよ。大満足です。</p>	<p>笑顔で帰ってきたのだから嬉しいです。家でたくさん話をしてくれたので、楽しかったのだから嬉しいです。また、参加したいと思いました。</p>	<p>学校行事でも1泊2日の経験しなく、2泊3日は親も子ども多少の不安を抱えながらの参加でしたが、心満たされて帰って良かった。楽しかった。家でたくさん話して、何かあったらすぐに駆けつけられる安心感もありました。大学で泊まるといって貴重な体験ができ、参加費が安かったことも大変魅力でした。</p>
5.帰宅後の様子や、キャンプでの出来事について話していたこと	<p>学生との活動が楽しくて、憧れを経験したようです。参加できたことがますますよかったです。次回を期待できる程に深い思い出を作ってもらえたからこそ成長できた。</p>	<p>お兄さん達が、明るく元気で、送り迎えで関わった時とても感動しました。子どもは年輪的に恥ずかしさを感じたり、離れたい車輪になることもありますが、学生さんの明るさを感じて、自己表現することの大切さを覚悟して、自分らしく、楽しもうと思っただから。とても楽しかったよ。今日も、楽しかったよ。肝試しが楽しかったよ。お兄さんたちが、たくさん遊んでくれたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。</p>	<p>憧れた様子もありました。誕生日ケーキを食べたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。</p>	<p>お迎えに行き車に乗るとすぐに、人生で一番楽しかった！あと1ヶ月位は楽しかったよ。誕生日ケーキを食べたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。</p>
6.実施前の期待度	5	6	6	9
6.実施後の満足度	8	10	10	10
8.次回以降に求めるプログラム内容、改善が必要な点	<p>参加者の保護者としては、自立を促してもらえらるプログラムが組み込まれるとうれしい。企画自体のコンセンサスや目的、狙いを共有できると保護者側からの新しい目標でみられるものありがたいです</p>	<p>女の子の母としては、お見かけした際女子の学生さんが少ないのが、少し心配になりました。先生が女の子の方だったので、安心はしていますが...</p>	<p>・ごはん作りをもっと一緒にしたかった ・夏休みなので、宿題を一緒にやってもえらる時間があると嬉しいかも ・年輪が違ってくるのが、知れたかかった様です。うちの子どもが聞いてきたことだけども、一緒に寝るまでは、一緒に寝る体制になってもらえらると、眠りにつけるかもいいですね。その後は先生さんと楽しんで下さいます</p>	<p>特にありませんが、1日の終わりに、「無事全活動を終えました」程度のメッセージがあるかと親としては安心かと思えます。</p>
9.全体的な感想や要望、大学生へのメッセージ等	<p>非常にいい経験させせてもらえらる。強いて云うなら悔しいくらいにいい経験があるといいいが、参加人数が増えることで自然に味わえることもあると思う。暖かく接して頂き、一つ一つの大きな経験を頂けて感謝いたします。</p>	<p>本当にいい経験させせてもらえらる。ありがとうございます。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。お兄さんたちが、お話を聞いてくれたよ。</p>	<p>みなさんから頂いたカードを大切に何度も読み返していいました。いただいたネームタグも飾ってきくと部屋に飾るにしても飾っていいですね。みんなに会いたいと思っただから、3泊4日がいい。何回も行っていいです。次はいつかまた同じ世代の仲間と遊びたいです。その真ん中の学生さん世代との触れ合いはほんとにも新鮮なことだったと思います。本当に感謝の気持ちです。</p>	<p>みなさんから頂いたカードを大切に何度も読み返していいました。いただいたネームタグも飾ってきくと部屋に飾るにしても飾っていいですね。みんなに会いたいと思っただから、3泊4日がいい。何回も行っていいです。次はいつかまた同じ世代の仲間と遊びたいです。その真ん中の学生さん世代との触れ合いはほんとにも新鮮なことだったと思います。本当に感謝の気持ちです。</p>

活かすため、本実践によって得られた示唆から地域において大学が主催となって実施するイベントの意義について一つの考察を試みたい。

1. 物理的な距離の近さを活かした継続的な場の創出

本サマーキャンプ実践は、以前に開催したスポーツ大会「SEKI カップ」の参加者を対象にしたことは先に述べた通りである。子どもたちから「また参加したい」という声がかかれたことや、保護者向けのアンケートに「自宅から距離が近いために何かあればすぐ駆けつけることができる」との回答があったこと、そして、参加を決定した要因の1つに「中部学院大学に親しみや信頼がある」が挙げられていたことは、大学がその地域の住民に向けたイベント等の「場」を創出する意義の1つにつながると考えられる。なぜなら、参加者の子どもたち及びその保護者が先述のような意見を述べた背景には、大学が「次も参加できる可能性が高い距離感」であることが大きいと推察されるためである。このことは、これまでも多くの場面で実感として感じられてきたものであっただろう。身近な例で考えれば、本学の大学祭である「たのしみん祭」は、まさに地域にひらかれた「場」であり、近隣の地域住民は毎年でも気軽に訪れることができるものの1つである。

大学と地域の「連携」という面からみても、距離の近さは重要であると考えられる。例えば、中塚・小田切(2016)は、大学・地域連携には2つの形として、産学連携的地域連携とも呼ぶことのできる伝統的な連携と、「若者の拠点」という大学の特性を活かした新しい形の連携があることを指摘し、後者については、各地の取り組みから「交流型」、「価値発見型」、「課題解決実践型」、「知識提供型」の4つのタイプを析出している。なかでも「交流型」は、「地域の農家や住民とともに、農作業やイベントを行う活動タイプ」(中塚・小田切, 2016, p.7)とされており、本サマーキャンプ実践はこの「交流型」に近いものであったと考えられる。中塚・小田切(2016)は、このタイプの課題として、頻繁な往来が前提となるために大学-地域間の距離が遠いと実現しにくいことを挙げているが、逆に、大学-地域間の距離が近ければ、「交流型」の大学・地域連携は生みやすいとも考えられる。

本実践からは、少ない事例ながらも、参加者がもつ大学への物理的な距離の近さは、何らかのイベントに参加する際のハードルを低くすることや、繰り返し参加する可能性を高めることに繋がるであろうことが確認できたといえる。したがって、大学が、近隣地域にひかれた「場」を、単発のイベントであれ、継続的に創出することは重要であろう。

2. 大学の様々な資源の活用

大学には豊かな資源がある。地域の小学校や公民館等にはない専門的で多様な設備や、教職員や学生をはじめ

とする人的資源はその代表的なものであろう。本実践は、大学の夏季休業中に実施したため、その期間にはほとんど使用されていない構内の設備や教室を有意義に使用することができた。また、本実践において非常に重要な役割を果たした学生が、スタッフとして3日間を費やすことができたのも、長期期間中ならではの結果だったと考えられる。さらに、普段はほとんど活用されていなかった寝袋等の備品を有効活用できたといえる。大学内には保管されているのみになっている備品が、少なからず他にも存在するであろう。それらを共有できるシステムができれば、さらに有効に活用できることが予想できるため、これは今後の課題として付言しておきたい。

他方で、大学の資源の1つである、専門分野ごとの情報を活かすきれなかったことは課題である。例えば、二重・郷間(2020)が、子育て期にある地域住民に対し、大学に設立された研究センターへのニーズを調査した結果、子育てに関連した情報による支援を要望が多かったことを報告しているように、様々な専門的な情報を提供することで参加者にもよりメリットがもたらされると考えられる。本実践での保護者向けのアンケートにおいても、子どもたちの自立を促すようなプログラムへの要望があり、このことは、筆者らの専門分野の研究成果に基づくプログラムを要望した声であったとも読み取れる。今後は、物的ならびに人的資源のみならず、情報という面からの資源の提供も視野に入れる必要がある。

3. 地域の子どもたちが集まる場としての大学

部活動の地域移行が進められる一方で、地域の子ども会等は衰退しており、学区を超えた子どもたちの交流の機会もそれに伴って減少している。放課後の習い事等を通して、学校とは友人関係を構築できる子どもたちもいるものの、それは一部であったり、あるいは、そのような場での子どもたち同士の関係性は限定的であり、かつ、固定されたものであったりする可能性が非常に高い。今回のサマーキャンプには、学区や学年に関係なく5名の子どもたちが参加したが、お互いをほとんど知らない状態からスタートし、新しい仲間関係を築くことができたことは有意義であったようである。大人とは異なり、子どもたちは自分たちだけで遠出をすることや、新しいコミュニティに参加することは難しいが、大学が地域の子どもたちを対象に場を提供することで、そのことが可能になると考えられる。加えて、子どもたちにとって学生との交流は、同世代でも親世代でもない、いわゆる“お兄さん・お姉さん”を間近に感じ、自身の将来像を考えるきっかけにもなりえるということがアンケートからも示唆されていた。これらに鑑みれば、地域の子どもたちの交流の場の創出に、大学による地域貢献の1つの形を見出すこともできると考えられる。

V. おわりに

近年の大学が果たす役割に1つに、地域貢献が挙げられる。本研究では、「学生による地域貢献事業」の一環として、2023年8月に実施したサマーキャンプの実践内容を報告し、そこから地域におけるイベントを大学が開催することの意義について考察を試みた。

まず、今回実施したサマーキャンプは、子どもたちならびに保護者に非常に肯定的に捉えられ、有意義な実践になったといえる。特に、参加者の子どもたちに対し、日常とは異なる環境の2泊3日を提供したことが、そのような評価に繋がったと考えられる。

そして、サマーキャンプ実践を通して、大学が地域に開かれたイベントを開催する意義として、物理的な距離の近さを活かして継続的に開催できること、大学における豊かな資源の活用を活用できること、地域の子どもの交流の場になりえることの3つを考察した。

今後に向けた課題としては以下の点が挙げられる。まず、研究上の課題としては、サマーキャンプ実践への参加者が少なかったことや、事前のアンケートの収集をしていなかったために、成果を量的に評価することが困難だった点が挙げられる。加えて、実際の内容を適切に評価するためには、内容に即した尺度開発も必要となるかもしれない。継続的な実践が可能になれば、それも視野に入れることとしたい。他方、個々の子どもたちの実際の様子を詳細に記録したフィールドノートの作成等は困難であったため、事例研究とすることも困難であった。したがって、本論文は実践内容を報告する一資料にとどまったことは課題である。また、今回のような実践を多面的に評価するためには、学生からの視点も必要であったといえる。

加えて、実践上の最大の課題として、サマーキャンプ実践に向けた事前準備を十分にできなかった点が挙げられる。サマーキャンプ後に実施した参加学生との振り返りでは様々な反省点が挙げられ、具体的には、各アクティビティの詳細な点まで決められていなかったこと、雨天時の想定ができていなかったこと、時間管理が不十分だったこと、用具や食材の調達が不十分だったこと等であり、共通していたのは、より綿密で周回の準備が必要だったということであった。今回の実践は初めての試みであり、筆者も含め手探りの状態であった。次回以降、同様の実践に取り組む際には、上述の課題を踏まえ、計画・実施することとしたい。

VI. 倫理的配慮

本プログラムは、アンケートや写真等のデータを個人が特定できない形で研究に活用することを参加者及びその保護者に承諾を得たうえで実施し、アンケートについては、同意する場合にのみ回答の提出を求めるオプトアウトの形で回収した。また、実施にあたっては、所属機

関の研究倫理審査の承認を得た（承認番号：C23-0026）。

【謝辞】

本実践にあたっては、「学生による地域貢献事業」の助成を受けました。関係者の皆様に深く感謝申し上げます。ご支援ならびにご協力頂き、誠にありがとうございました。

【引用・参考文献】

- 1) 二重佐知子・郷間英世 地域支援における大学の役割—子育て期のニーズ調査—, 姫路大学大学院看護学研究科論究, 4, 49-56, 2020
- 2) 平野吉直 豊かな体験が人間をつくる, 伊藤俊夫編, 豊かな体験が青少年を育てる, 財団法人 全日本社会教育連合会, 5-15, 2013
- 3) 文部科学省 令和4年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査 調査結果の総括, 2022, https://www.mext.go.jp/sports/content/20221215-spt_sseisaku02-000026462_4.pdf
- 4) 村瀬浩二・落合優 子どもの遊びを取り巻く環境とその促進要因:世代間を比較して, 体育学研究, 52(2), 187-200, 2007
- 5) 中川昌子 幼少時の自然体験が大学生の農業意識に与える影響—大学農学部における農業実習活動を通して—, 環境教育, 18(3), 3-14, 2009
- 6) 中塚雅也・小田切徳美 大学地域連携の実態と課題, 農村計画学会誌, 35(1), 6-11, 2016
- 7) 日本野外教育学会編 野外教育学研究法, 杏林書院, 2018
- 8) 西田順一・橋本公雄・柳敏晴 児童用組織キャンプ体験評価尺度の作成および信頼性・妥当性の検討, 野外教育研究, 6(1), 49-61, 2002
- 9) NPO 法人 全国てらこやネットワーク, 2024, <http://terakoya-network.com/> (2024年1月9日確認)
- 10) 小黒恵太郎 特集2 大学連携と地域の教育～世代を超えた学びをつくる、温故知新の教育ネットワーク, TURNS, 61, 80-87, 2023
- 11) 重松敏則・朝廣和夫・西浦千春 農林体験が青年の環境認識に及ぼす影響, ランドスケープ研究, 67(5), 833-836, 2004
- 12) スポーツ庁 子供の運動習慣形成と体力向上に向けた今後の取り組みについて, 2022, https://www.mext.go.jp/sports/content/20221223-spt_sseisaku02-000026462_25.pdf
- 13) スポーツ庁 子供の運動習慣形成と体力向上に向けた事例紹介～学校における体育・保健体育授業以外の取り組み事例～, 2023, https://www.mext.go.jp/sports/content/20230414-spt_sseisaku02-000026462_1.pdf